

アブラツノザメ 日本周辺

North Pacific Spiny Dogfish, *Squalus suckleyi*



管理・関係機関

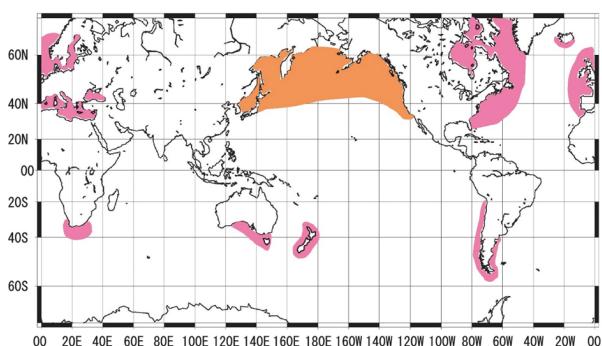
なし

生物学的特性

- 体長・体重：雌：全長 120 cm・13 kg、雄：全長 95 cm・4 kg
- 寿命：60 歳以上
- 成熟開始年齢：雌 23 歳、雄 14 歳
- 繁殖期・繁殖場：2～5 月、繁殖場は調査中
- 索餌期・索餌場：調査中
- 食性：魚類、頭足類
- 捕食者：東北地方太平洋岸沖のマダラの胃内容物として出現

利用・用途

第 2 次世界大戦前後は、ビタミン A、肝油の原料としてかなりの需要があったが、合成ビタミン A の普及によりアブラツノザメ漁業は衰退した。東北地方では刺身や煮物、照り焼きなどで食されるほか、ちくわ等の練り製品原料として利用される。また、近年、肝油やさめ軟骨エキスなど健康補助食品の原料の一つになっている。



アブラツノザメ類の分布（阿部 1986 を改変）
オレンジ色：*Squalus suckleyi*、ピンク色：*S. acanthias*

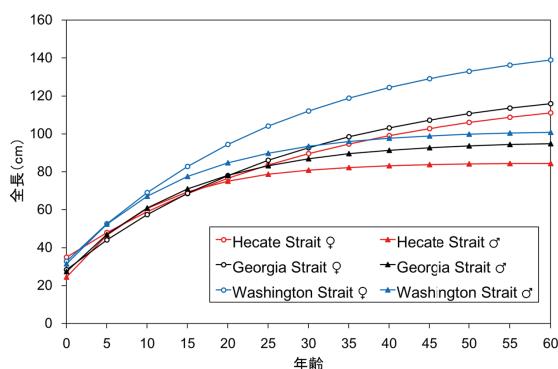
漁業の特徴

北日本の太平洋側や日本海側では、かなり古い時代から漁獲されていたが、漁獲対象として注目されるようになったのは明治 30 年代末頃からであり、北海道、青森、秋田、石川県などで当初はマダラなどを対象とした底はえ繩漁船の兼業対象種として漁獲された。その後、昭和初期に機船底びき網で漁獲されるようになった。太平洋戦争後は食糧増産政策に伴い主に機船底びき網により積極的に漁獲され、漁獲量が増加した。その後、本種の漁獲量は、1950～1960 年代の合成ビタミン A の普及による国際取引の減少とそれに伴う魚種単価の下落により急激に減少した。現在、本種の主な漁獲は、以前に比べて同種を主対象とした操業が減少した沖底と本種を漁獲対象とする底はえ繩漁業により行われており、さめ類全体の漁獲量より推定した本種の漁獲量は 1990 年以降 2,900～4,600 トンで比較的安定して推移しており、2016 年は 3,100 トンであった。

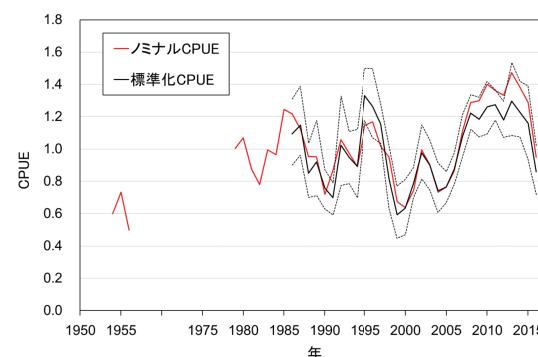
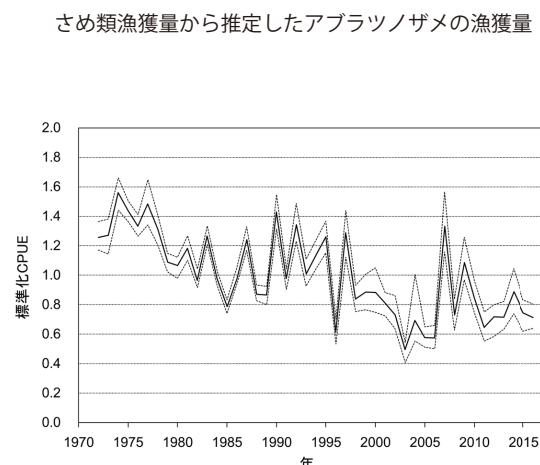
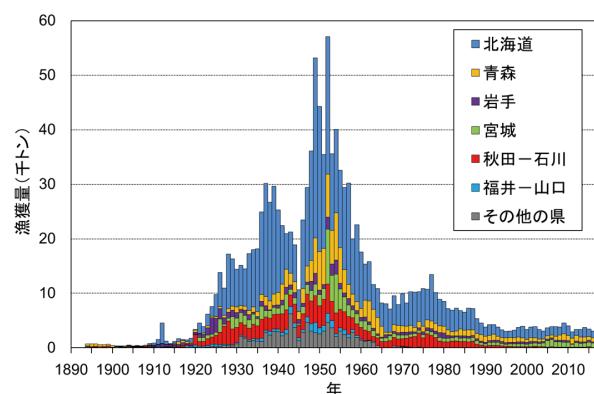
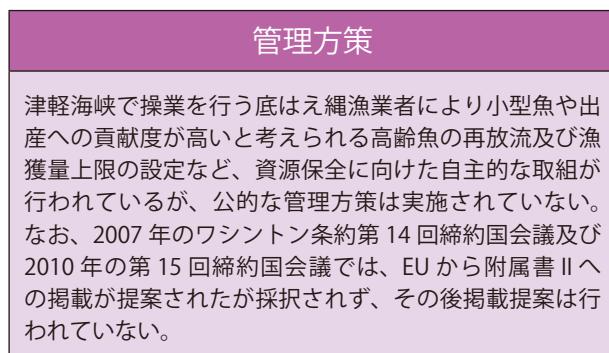
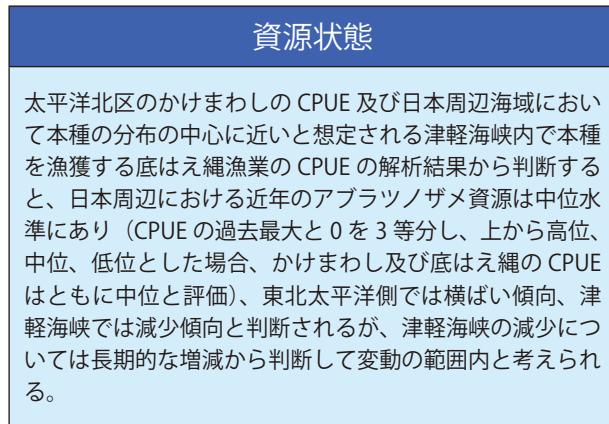
漁獲の動向

資源状態の指標値として、1972 年以降の沖底漁獲成績報告書から集計した太平洋北区のかけまわし（1 そうびき沖底）の CPUE と、主要な漁場である津軽海峡周辺における 1979 年以降の青森県の底はえ繩による漁獲量及び延べ操業隻数から求めた CPUE を用い、資源の動向を検討した。

太平洋北区においてアブラツノザメの漁獲が多いのは襟裳西～尻屋崎海区で操業する青森県のかけまわしである。かけまわしによる CPUE は 1972 年以降 2000 年ごろまで減少傾向が認められたが、それ以降は近年に至るまで横ばい傾向にある。分布域の中心にあり、アブラツノザメを狙った操業が行われている津軽海峡内の底はえ繩では、近年の CPUE が 2000 年代前半の約 140% の水準を示しているが、過去 5 年の CPUE には減少傾向が認められる。さらに、底はえ繩の 1979～2016 年のノミナル CPUE（標準化されていない CPUE）は、1954～1956 年に比べて高い水準にある。



カナダ西岸のアブラツノザメの雌雄別海域別年齢－全長関係
(Ketchen 1975 より作成)



ア布拉ツノザメ（日本周辺）の資源の現況（要約表）	
資源水準	中 位
資源動向	横ばい（東北太平洋側） 減少（津軽海峡）
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	—
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	3,077～3,742 トン※ 最近（2016）年：3,077 トン 平均：3,387 トン（2012～2016 年）
管理目標	検討中
資源評価の方法	かけまわし及び底はえ縄の CPUE により水準と動向を評価
資源の状態	検討中
管理措置	検討中
最新の資源評価年	—
次回の資源評価年	—

※漁獲量は全国のさめ類漁獲量と過去のさめ類に占めるアブラツノザメの平均的な割合から推定した値（2016 年は暫定値）